

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Preface

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長, 志珠絵, Osa, Shizue メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1182

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



序；特集号「女性と世界」及びリレー講義 「女性と世界」について

長 志 珠 絵

本特集号は、研究班『女性と世界』の成果であると同時に、2年度にわたるリレー講義『女性と世界』とリンクする形で企画された新たな試みである。2年度分のリレー講義題目及び担当者は〈表〉に示した。以下では本特集号の前提として、リレー講義「女性と世界」について解説しておきたい。

リレー講義は二〇〇五、六年度（後期二単位）を通じ、他大学との地域連携事業であるユニティ単位互換科目として行なわれた。講師は研究班のメンバーも含め、全員神戸市外国語大学の専任教員であるが、学科横断的に構成され、その専門領域は多岐にわたる。したがって研究報告は講義の前提、共有として位置づけられ、情報を交換する場として設定された。

講義はその成果であるが、特徴は2点ある。一つは文学、言語学、人類学、歴史学等様々な学問的バックグラウンドを持つ講師が各自のフィールドを、「世界」を構成する地域研究としてとらえ、かつジェンダー射程によって読み解き、受講生に示した点である。「女性と世界」というタイトルはやや漠然とした感を受ける向きもあろうが、本リレー講義はジェンダースタディーズの専門家を集めた構成をとっていない。逆に、ジェンダー射程を共通の枠組とすることで、具体的なケーススタディを扱う講義全体に地域間の比較や共通点を見いだし、受講者の思考を広げようとする試みである。実際、他大学の受講生からは「外大はいつもこのようなバラエティに富んだ講義が常置されているのでしょうか」といった質問も受けた。「もっと他国のことを知りたくなりました」「この講義は先生が週替わりで変わるのでいろんな世界の社会に対して勉強でき興味が持てた」といった受講生の感想は回を重ねるごとに増えた感を抱く。もちろん方法論として考えた場合、研究分析視角としての「女性」と「ジェンダー」用語は同義ではない。またジェンダー研究はすでに男性性、男性研究による切り口も必要とされる段階にある。特に後

者の点について、講師個々には意識的に論じる場合もあったが、全般に学的蓄積は豊富ではなく、共同研究、ましてやりレー講義としては今後の課題というべきだろう。

2点目にリレー「講義」形式それ自体は従来から試みられてきたが、本講義は単位互換として複数の大学の受講生が受講した。2年間で受講生の所属機関は、各大学並びに高等専門学校、高等学校も含め、7校に及ぶ。いわば学園都市という地域の高等教育機関に開かれた点も特徴だろう。主題に沿った、学科横断的、地域に開かれたリレー講義という形式は可能性を持っているように思われる。

以下では受講生の文章から、講義全体の感想に関わる部分を抜粋し、講義全体を通じてどのようなメッセージが受け取られたのか、気づいた点を指摘しておきたい。

////////////////////

(1) 「男女平等」の再考とジェンダーロール、社会のしくみの存在を指摘するもの

「私はこの講義全体を通して女性問題全体に対する意識が変わった。以前は女性問題といえば専ら現代社会における男女の不平等について考えがちであり、さらには、その要因は個人の心の持ち方にあるのだから、それがどうしたら変えられるのだろうということばかり考えていた。しかし現代の女性問題を考えるとき、男性と女性の支配関係という単純なモデルだけではなく、その背景に歴史的経済的政治的構造があり、それをまず知ることが重要なのだと分かった」

「全ての講義を通して、男性優位の社会で女性が自分らしく自由に生きるには、女性優位にくつがえすだけではなく、“こうあるべきだ”という考えを捨て、“こうあってもいい”と一個人を受入れてくれる社会を作っていかなければならないのではないかと考えた」「講義を受け、私の変化した視点は、豊かな社会が必ずしも女性に良い影響を与えるものではないということである・・・豊かな社会であることで、女性は時に働かなくていい状況におかれたり、働かなければ生活が困難になったりと簡単に振り回され自分の存在の意味を見失ってしまうと言える」

「男性的女性的活動を決めつけてその中でのみ動くのではなく、お互いの分野にもっと挑戦していくことで新たな発見や問題解決の糸口が見えてくるのだと思った」

(2) 事象の比較論、比較史の可能性を指摘するもの

「今回世界の女性事情を見て行くことで視野が広がり、結婚ということについて以前より柔軟な意見を持つことが出来るようになりました」

「家族のあり方や社会の中での女性の立場、また男女平等に関する法律、結婚に対する人々の考え方などは国によって様々であるということが分かった。講義を受けたことでこのような新たな視点を持って世界の国々を見るきっかけとなった」

(3) 自身を取り巻く思考、環境に思考を広げ、問題点を指摘するもの

「男性、女性について、私自身、考えたことがなかったが、今回、この講義を通して普段の生活の中でも考えるようになった。例えば女らしさ、男らしさということ、女だから、男だからということ・・・まだまだある女性問題だが、社会に貢献しているのは男性だけではないので共に生きる社会というのを築ける世の中になってほしい」

「日本においても女性はイメージ作りに利用されている。それは最も生産効率がよく賃金コストを安くできる体制としての〈男は仕事、女は家庭〉というメッセージである。これらのメディアによる性差別があることをふまえると女性だけでなく、男性もジェンダーを学ぶべきである。今後潜在的な男女格差があることを前提として、人間的尊重、個性の尊重という視点で女性の社会的歴史的状況についての知識を得ること、現象にばかり振り回されず、それらを生みだしている構造に注目してみることで学んだことを活かしていきたい」

「男性と女性では文化的性差があり、そのことで出来る出来ないが生じてくる。『男性は仕事をして一家の主。女性は家庭で子育て』。これも当たり前ではなく、数ある選択肢のひとつである。講義を通して自分にも微かでも女性に対して間違っただけの考えをもっていることに気づいた。」

「私自身に子どもが出来たら積極的に育児参加していきたいと思います」

ここでは共通性があるもののうち、比較的まとまりのある感想を抜き出してみた。講義をほぼ毎回出席した受講生に対し、受講前と受講後の受講生の側の認識の変化を書いてもらうよう指示した結果でもある。この一方、受講生の側の近年の傾向として性別を問わず、「フェミニズム」用語に当初から根拠のない漠然とした拒絶感を持っていたり、「ジェンダー」概念を既知としつつ違和感を吐露するもの、あるいは講義の多様性が同時に「男女差別はどこにでもあるのでなくなる」「男女差別はいけない」、「男女の違いはあってはいいのではないか」といった紋きり型の意見を誘導する例も少数な

がら登場する。ジェンダーバックラッシュがますます深刻化する日本の政治社会状況にあって、大学教育の場もまたその例外ではありえない。どのような切り口で問題を深め共有していくのか。リレー講義という場を媒介とした共同研究は、通常共同研究とは異なる発想ですすめられた試みであったと思う。

最後に、今回、本特集号にはそれぞれ講義内容をふまえつつも各自、独立した論考として6本の原稿が寄せられた。地域的バラエティに加え、はからずしも植民地主義や移動といった問題関心が共有されている。小特集ともいうべき内容は、研究班・リレー講義という枠組みの中で編まれた成果である。

表7 2005-6年度「女性と世界」講義タイトル及び担当者一覧

05年度タイトル

序論：近代国民国家と女性-日本編	長志珠絵	イントロダクション	浜崎桂子
アメリカ合衆国における女性解放	篠田実紀	アメリカ合衆国における女性解放	篠田実紀
アジア系アメリカ移民の女性	南川文里	アメリカ合衆国の日本人女性	南川文里
アメリカ文学における女性	辻本庸子	アメリカ文学における女性	辻本庸子
中南米における先住民女性	小林致広	中南米-先住民族マヤの女性	小林致広
イギリス文学における女性	御輿哲也	イギリス文学における女性	御輿哲也
大英帝国植民地政策と女性	並河葉子	大英帝国植民地政策と女性	並河葉子
フランスにおける移民女性	武内句子	フランスにおける移民女性	武内句子
ロシアにおける女性	R. エルマコーワ	ロシアにおける女性	R. エルマコーワ
チベットにおける女性	武内紹人	帝国・移動と女性-日本編	長志珠絵
中国における女性	下地早智子	中国における女性	下地早智子
南アジアの女性	大石高志	南アジアの女性	大石高志
総論-国民国家と女性-ドイツ編	浜崎桂子	国家と女性-ドイツ編	浜崎桂子